

兵庫県における地域間交流とコミュニケーション空間の展開

鎌倉 淳

キーワード：地域間交流、コミュニケーション空間、都市と農山村、

兵庫県但馬地域、ふるさと青年協力隊

1. はじめに

兵庫県は瀬戸内海から日本海まで南北約 150km の範囲に広がっている。その南部都市地域に人口と産業機能が集積し、一転して、北部農山村地域では人口減少と地域振興の立ち後れの現状にある。また、近年の交通網の整備と、アウトドアブームに象徴されるレクリエーション活動の広がりによって、南部都市地域に居住する人々の生活空間が、断続的であるにせよ、北部農山村地域にまで伸びつつある。このとき注意しなければならないのは、北部農山村地域の受け入れ態勢である。南部都市地域の意向のままに受動的な対応に終始するのであれば、南部都市地域への依存性がますます助長され、北部農山村地域の独自の地域振興はいよいよ難しくなってくる。

地域の発展、地域の活性化のためには、他地域と対等の立場で他地域からみて有用なモノ・サービス・人・情報などを創出、発信するための自助努力がどうしても必要である。その第一歩として、地域のことを他地域の人々に知ってもらい、他地域から足を運んでもらうため、地域間の交流を活発に展開することが重要な意味をもつ。

本研究では、兵庫県北部の農山村地域がどのように人的交流を図っているのか、それによってどのような成果が生み出され、今後どのように改善展開していくべきなのかを探究する。また、自分自身の体験をもとにして検討を加える中で、地域間交流の現状について考察し将来を展望する。

そのため、まず、主として文献資料と統計資料を収集・整理し、兵庫県の南部と北部の地域性を把握する。続いて、自分の参加した「ふるさと青年協力隊」の事業をフィールドワークと位置づけ、実際に展開されている地域間交流について検討する。さらに、これらの結果をふまえて、都市地域と農山村地域との地域間交流の課題について考察する。

2. 兵庫県の南北格差

兵庫県は南北約 150km、東西約 110km に広がる県土を有している。丹波山地・中央山地・西播山地などが東西に連なっているため、それらを境にして大きく南北に分断されている。また県土の約 80% が山地であるので、昔から人の往来が困難な土地柄である。そのため、長年にわたり政治経済の中心となってきた県庁所在地の神戸市および阪神地域や、西部の大都市姫路市をはじめとする播磨臨海部などの瀬戸内海沿岸地域の発展に比べ、内陸中山間地域と日本海沿岸地域はやや立ち後れているのが現状である。

人口の地域的分布についても南北間の格差が著しい。兵庫県エリア別人口の推移(図1)によると阪神や神戸、東播磨の大幅な伸びに比べ、但馬や丹波は逆に減少または停滞している。1960年代の高度経済成長期以降、北部農山村地域からの人口流出と南部都市地域への人口流入が継続してきたものと考えられる。

また、第3次産業機能の都市地域への集中も著しい。兵庫県における各種機能の市部への集中度はいずれも 85~95% と高い比率を示している(図2)。逆に郡部は、県土の広域を占めるにもかかわらず、各種機能の占有率が低いため、面積比率(密度)の数値はもっと低いものになり、産業基盤や生活環境の違いが際立ってくる。この点についても、兵庫

県の南部都市地域と北部農山村地域との格差が明らかである。

兵庫県内の地域格差には、南北を結ぶ交通手段が不十分なことも一因となっている。その改善策として現在、播但連絡道路では朝来郡生野町から和田山町までの延長工事が進められており、舞鶴自動車道路についても氷上郡春日町の春日インターチェンジより遠阪トンネルを経て和田山町に至るルートが計画されている。これらの改善のための努力とともに、各地域の特性を十分に把握した上での展開が今後期待されることである。

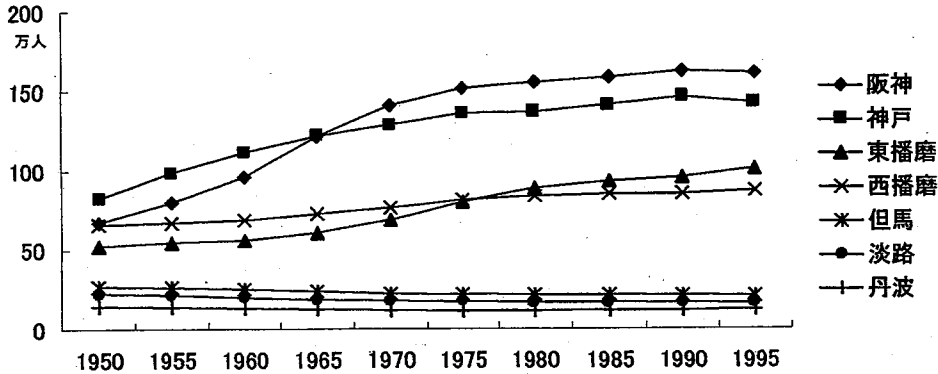


図1 兵庫県エリア別人口の推移 (出所：各年国勢調査報告書より作成)

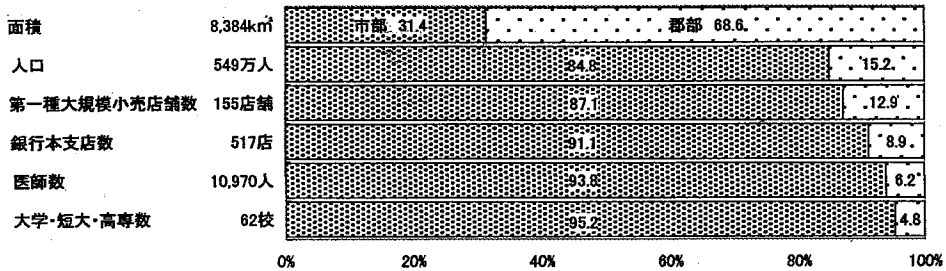


図2 兵庫県における各種機能の市部への集中度

(出所：兵庫県土木部交通政策室 (1995) 『ひょうご 21 世紀交通ビジョン』 p.9 より)

3. ふるさと青年協力隊事業と地域間交流

兵庫県では、都市と農山村の間で地域を越え、世代を越えて県民が相互に交流し連携しながら、豊かさを実感できる地域共生社会をめざして、さまざまな取り組みが行われている。ふるさと青年協力隊は、その先導的役割を担って1990(平成2)年にモデル事業として発足し、1991(平成3)年からは、より積極的に都市農山村交流を展開するため、多くの事業を実施している(表1)。それらのほとんどは、南部都市地域と北部農山村地域を抱える兵庫県の特性をふまえ、さまざまな交流活動を通じて地域間の連携を図るため、南部都市地域の青年を北部の但馬地域へ派遣するものである。参加した青年が、農山村地域の高齢者を含む人々との交流や共同作業を通じて、地域の活性化に寄与するとともに、これらの体験を通じてふるさとの課題や文化に触れ、視野を広げ自己実現を図ることを目的としている。また、参加者たちによる地域間のネットワークづくりを促進していくという側

面も合わせもっている。

本研究では、1997（平成9）年に実施された朝来郡朝来町の「'97ふるさと青年協力隊 in あさご」と1998（平成10）年に実施された朝来郡和田山町の「1998年度ふるさと青年協力隊和田山町」の事例について詳しく分析した。朝来町は、これまで毎年実施しているので、過去の実績を一番残している町である。そのため、事業後に継続的な交流を行うノウハウが充実しており、町による実施地区および参加隊員への関わりやアフターフォローもしっかりとなされている。

一方、和田山町では、但馬の交通の要所に当たるので人口減少がそれ程深刻でないためか、2回目の実施であった。それでも、受け入れ先である白井地区では、毎年8月中旬のお盆に行っている夏祭りをわざわざ、ふるさと青年協力隊実施時の8月末にずらしてもらったりした。このような地域をあげての取り組みによって、事業は十分成果の見込めるものであった。町にこれまでのノウハウの蓄積が少ないぶん、今後はこれまでに参加したことのあるOB隊員を中心にして、隊員を主体とした交流が発展していくものと期待がかかる。

4. コミュニケーション空間の展開

ふるさと青年協力隊がかなりの成功を収めているのは、受け入れ側となる北部農山村地域だけでなく、受入れてもらう側の南部都市地域でも、日頃の事業が進められているからである。兵庫県青少年本部が中心となって、OB隊員の活動母体である「ふるさと青年協力豊か会」や、各種青少年団体などが協力している。つまり、北部農山村地域の求める交流と南部都市地域の求める交流の間に立って、兵庫県青少年本部が双方の希望を満たすよう調整しているために成功の結果が伴うのである。

これからさらに、隊員をはじめとする南部都市地域の者が交流しやすくするにはどうすればよいのだろうか。ふるさと青年協力隊の現状を考えると、「個人と地域との交流」といえるだろう。隊員は、瀬戸内海沿岸地域の青年が個人の希望により応募しているものである。そのため、隊員どうしの地域的なつながりは皆無に等しい。それに対して、受け入れ町は地域ぐるみで企画運営している。もともとしっかりとしたコミュニケーション母体であるので、地域をあげての交流となっているのである。

個人と地域の交流のよい点は、都市地域の者にとっては一気に生活空間が広がるという点だろう。たとえば私の場合、大学・アルバイト先・家庭・サークルの4拠点を中心に生活を営んでおり、ごく限られた生活空間しかもっていなかった。しかし、ふるさと青年協力隊に参加して、地域の人々や参加隊員などとの新たなつながりにより、かなり広範囲に生活空間が広がった。また、より長期にわたるライフサイクルの面でも、結婚・転居・転職などによって変化する例も多い。

ふるさと青年協力隊において、隊員は個人の体験を通して受け入れ先をまず知り、参加によって気に留め、参加後の交流で日常になるという経過をたどっていく。また、受け入れ先は隊員にまず期待し、事業を通して知り、もっとつながりをもとめとさまざまなイベントを開くというプロセスで進んでいく。このことは、ふるさと青年協力隊事業が都市地域の青年と受け入れ地域との交流のきっかけに過ぎないことを意味している。いいかえれば、今後どのような交流を図っていくかは隊員と地域とに委ねられていることになり、相互のたゆまない努力の必要性を示唆している。そのため、OB隊員が中心となって結成している、ふるさと青年協力豊か会の役割は重要である。

5. おわりに

今日、高齢化社会の進行に関連して種々の問題が浮上している。とくに、本研究で対象

とした兵庫県北部の但馬地域では顕著に現れており、その大きな要因は兵庫県内の南北格差にあると考えられる。南部に各種機能が集中し経済活動も集積しているため、就業機会を求める20~30代の人口が北部から流出して南部に流入する動向が続いている。兵庫県の北部地域から若者が流出してしまうということは、この地域で生まれる子どもも減少するということになる。逆に高齢者は年々増加の一途をたどる。人口の減少と高齢化の循環的な進行をできるだけ緩和するためにも、兵庫県では地域間交流を押し進めるべきである。本研究では、その試みの一つである、ふるさと青年協力隊の事業について詳しく考察した。この事業は、兵庫県の南部地域と北部地域、双方のコミュニケーション空間の展開に大きく貢献している。さらに、さまざまな青少年活動の啓発を行い、地域間交流の進展を促している。その成果によって、南北の格差が少しづつではあるが、とくに意識面において狭まってきている兆しもみられる。しかし、こうした事業は交流のきっかけに過ぎないため、持続的な交流には双方の日常的な努力が必要となってくる。朝来町が国土庁長官賞を受賞した(記事1)ことは、地域間交流の持続的な努力の重要性を裏付けるものの一つである。

以上のことをふまえたうえ、兵庫県における地域間交流とコミュニケーション空間の展開に対して4つの提言をしたい。

- 1) 北部農山村地域は、祭りやイベントが地域間交流のきっかけにすぎないことを認識し、継続的な交流を図るように事業の質の向上に努力を惜しまないようにする。また、南部都市地域の意向に惑わされずコミュニケーションについての独自の理念を打ち出す。
- 2) 南部都市地域は、現在行われがちな「個人と地域との交流」から「地域と地域との交流」に発展させるべく絶え間ない努力を示す。そのためにも、まず都市地域内のコミュニケーション空間をしっかりと確立する。
- 3) 兵庫県の南北を結ぶ交通網を充実させる。移動時間の短縮は、日常生活に有益をもたらすだけでなく、地域間交流にも大切な役割を担う。また、体系的な観光事業を押し進めることにより、南北格差の是正を目指す。
- 4) 個人の一人一人が地域間交流の必要性を自覚する。兵庫県全土を視野に入れながらも、まず自らの生活地域のコミュニケーション空間を密なものにする。そのための啓発事業と活動に積極的に関与する。

朝来町が国土庁長官賞

過疎地域の活性化に努める自治体を表彰する国土庁長官賞を、朝来町が受賞しました。さまざまなイベントの開催や「芸術の森」を中心とした美しい町づくり、「セカンドハウス村」など豊かな自然を生かした都市との交流拠点の整備が認められ、今回の受賞となりました。



▲過疎地域の活性化に努める自治体を表彰する国土庁長官賞を本町が受賞。本年度は全国で本町のほか、2町2村が受賞しました。(写真は倉敷市で行われた表彰式)

記事1 朝来町広報1999(平成11)年1月号「国土庁長官賞受賞」

表1 ふるさと青年協力隊の派遣実績

区分	派遣先	時期	期間	派遣人数
1990 (平成2) 年度				
夏期事業	朝来郡 朝来町	1990年 8月 20日～25日	5泊6日	40人
冬期事業	出石郡 但東町	1991年 2月 8日～11日	3泊4日	36人
1991 (平成3) 年度				
夏期事業	美方郡 温泉町	1991年 8月 22日～27日	5泊6日	36人
秋期事業	城崎郡 竹野町	1991年 11月 1日～4日	3泊4日	30人
冬期事業	養父郡 関宮町	1992年 2月 8日～11日	3泊4日	36人
春期事業	朝来郡 山東町	1992年 3月 20日～23日	3泊4日	28人
1992 (平成4) 年度				
夏期事業	養父郡 大屋町	1992年 8月 20日～25日	5泊6日	33人
秋期事業	美方郡 村岡町	1992年 10月 31日～3日	3泊4日	24人
冬期事業	美方郡 美方町	1993年 1月 22日～25日	3泊4日	29人
春期事業	養父郡 養父町	1993年 3月 20日～23日	3泊4日	28人
1993 (平成5) 年度				
夏期	養父郡 八鹿町	1993年 8月 19日～23日	4泊5日	19人
	朝来郡 朝来町	1993年 8月 19日～23日	4泊5日	18人
秋期	朝来郡 生野町	1993年 10月 15日～18日	3泊4日	20人
	出石郡 出石町	1993年 10月 22日～25日	3泊4日	24人
	美方郡 浜坂町	1993年 10月 22日～25日	3泊4日	24人
1994 (平成6) 年度				
	朝来郡和田山町	1994年 8月 25日～29日	4泊5日	24人
	城崎郡 香住町	1994年 10月 13日～16日	3泊4日	22人
	城崎郡 日高町	1994年 11月 3日～6日	3泊4日	25人
1995 (平成7) 年度				
	豊岡市	1995年 8月 24日～28日	4泊5日	17人
	朝来郡 朝来町	1995年 8月 23日～27日	4泊5日	20人
	美方郡 浜坂町	1995年 11月 2日～5日	3泊4日	25人
	美方郡 美方町	1996年 1月 25日～28日	3泊4日	25人
1996 (平成8) 年度				
	朝来郡 朝来町	1996年 8月 22日～26日	4泊5日	20人
	養父郡 養父町	1996年 9月 5日～8日	3泊4日	26人
	美方郡 村岡町	1996年 10月 10日～13日	3泊4日	21人
	養父郡 八鹿町	1996年 10月 17日～20日	3泊4日	15人
1997 (平成9) 年度				
	美方郡 温泉町	1997年 7月 19日～22日	3泊4日	23人
	朝来郡 朝来町	1997年 8月 21日～25日	4泊5日	23人
	養父郡 養父町	1997年 8月 28日～31日	3泊4日	17人
	美方郡 村岡町	1997年 10月 24日～27日	3泊4日	25人
1998 (平成10) 年度				
	朝来郡和田山町	1998年 8月 28日～31日	3泊4日	25人
	美方郡 大屋町	1998年 10月 9日～12日	3泊4日	25人
	美方郡 村岡町	1998年 10月 17日～20日	3泊4日	25人
	氷上郡 山南町	1998年 11月 13日～16日	3泊4日	25人

出所：兵庫県青少年本部「ふるさと青年協力隊事業実績報告書」各年度より作成